

ソウル日本人学校における国際理解教育の実践

前ソウル日本人学校 教諭

福岡県久留米市立明星中学校 教諭 田 中 佳 幸

キーワード：国際理解教育，現地校交流，校外学習，韓国語

1. はじめに

日本と韓国のかかわりは古く、また、政治・経済・文化などあらゆる面できわめて緊密な関係にある。近年、韓流ブームの影響からか日韓の渡航者数は約476万人、姉妹都市提携数が123組、韓国内在留邦人数が27,102人にのぼる（2007年度）。

日本と韓国においては過去の歴史を避けることはできない。秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）や1910年の韓国併合などからくる戦後処理問題、竹島問題や教科書問題など現在に残る政府間レベルの問題があることも念頭におき生活していく必要がある。

ソウル日本人学校は、1972年に開校し本年度で37年を迎えた。校舎の老朽化も進み、来年度は移転が決定し、最新設備を持つ新校舎の建設が待たれている。平成21年5月現在では、児童数252名（各学年2クラス）、生徒数71名（各学年1クラス）の計323名である。職員は派遣教員21名、国際交流ディレクター1名、現地採用職員24名の計46名である。

ソウル日本人学校では、将来の日本を背負う「たくましく、心豊かに世界に生きる人」を育てるために、韓国で生活しているという貴重な体験を生かした教育活動をめざしている。平成20年度は、基礎・基本の確実な定着を図るとともに、一人ひとりの個性を生かし能力を高め、知・徳・体の調和のとれた教育を通して、心身ともに健康で国際性豊かな幼児・児童・生徒の育成に努めてきた。ここでは、平成18～20年度の中学部の国際理解教育における「現地校との交流」や「校外学習」、「韓国語」の授業について紹介させていただく。

2. ソウル日本人学校での実践

(1) 中学部における「国際理解教育」の目標

韓国の伝統や文化、価値観を理解し、自己を見つめ、国際社会をよりよく生きようとする力を育成する。

<めざす生徒像>

- ・一人ひとりを大切に、あらゆる人と協調しながら生きていくことができる生徒。（人権尊重と共生）
- ・韓国を中心とした異文化を理解するとともに、他国や日本の文化にも目を向け、それぞれのよさを認識できる生徒。（異文化理解と自国文化理解）
- ・多くの体験や情報の中から自分を見つめ、自分を知ること。また、自分の考えをしっかりと持ち、表現できる生徒。（自己の確立、自己表現力）

<目標設定の理由>

日本と韓国の関係を考えたときに、「過去の歴史」を避けて通ることができない。日韓の関わり合いは古く、日本は朝鮮半島から過大な恩恵を受けて発展してきた。しかし、韓国に対して「負の遺産」を残してきた時代もあり、現在も政府間レベルでの課題が残されている。

このような中でも、毎年たくさんの方が往来し、文化やスポーツでも交流が盛んに行われている。これから「ともに歩んできた兄弟国」として手を取り合って、よりよい関係を構築していくことが大切だと思う。その

きっかけを作っていくのが、韓国に在住している私たちの使命だと考える。具体的な手だてとしては、韓国の文化や伝統、日韓関係の歴史などを認識させることである。さらには、同年齢の子どもたちと触れ合う場をつくっていく。その中で、日本と韓国の類似点や相違点に気付かせ、日本の文化や伝統のよさを再認識させると共に、異なる韓国や似ている韓国に触れる楽しさも味わわせる。この経験が、自分の視野を広げ、幅の広い考え方ができるようになり、国際社会でたくましく生きることができる国際人へと成長すると考える。

(2) 国際理解教育年間計画（20年度）

学期	1 学 期				2 学 期				
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 年生	校外学習（20h）ソウル市内探訪								
2 年生	歴史学習・独立記念館見学（20h）								
3 年生	修学旅行（20h）								
全学年	韓国語（35h）・英会話（65～70h）								
	現地校交流 スポーツ				文化祭 現地校交流（10h） 駅伝 交流				

(3) 実践

① 現地校（ソウル特別市江南区開院中学校）との交流

<現地校交流の目標>

- ・異文化理解と自国文化の認識や発信をする。
- ・韓国語、英会話の活用と学習の必要性を認識する。
- ・実行委員会を立ち上げ、集団のリーダーの育成をはかる。
- ・中学部の仲間づくり。
- ・同年齢の子どもとの交流を通して異文化に触れ、自らの生き方にいかしていく。
- ・相手を受け入れ、思いやりを持って接する態度の育成（共生）をはかる。
- ・職員間交流

上記のような目標があり、国際理解教育の重要な行事として現地校との交流活動を位置付けている。本校では同一校との交流を年に3回行い、子どもたちは意欲的に取り組み、目標に近い成果をあげている。また、平成20年度は中学部職員を中心に職員間交流を定期的に行うようになり、本校と開院中学校との連携が深まり、よりよい交流ができるようになるなど子どもたちにも還元できるようになった。また、交流校である開院中学校は、久留米市内の中学校（配偶者の勤務校）と姉妹校提携を結んでおり、帰国後も継続した交流ができることが楽しみである。

20年度は5月にスポーツ交流会、10月に交流文化祭、12月に駅伝・マラソン大会での交流を行った。

【スポーツ交流】 5月16日実施（5時間の取り組み）

15人16脚をメインの競技として、本校と交流校の混成チームで行った。安全面を考慮して「女性用ストッキング」を使用して行った。ストッキングの回収や編み込みは思ったより時間がかかり大変だったが、ストッキングの準備ができると競技内容はわかりやすく、練習する時間の中で作戦等を話しあう時間もとれるので、他校

間交流会には適した種目だった。また、5月の交流会は、準備や練習を通して年度当初の学級・中学部の集団づくりや本年度の交流活動を行う上での意識付けにも効果的だった。

【交流文化祭】 10月31実施（10時間の取り組み）

合唱発表と文化的な交流活動をメインとしている。本年度の交流活動では、日本文化の認識・発信として「書での交流」と「餅つき」を行った。書での交流では筆ペンで、日本語・韓国語・英語を使用し、「座右の銘」や「好きな言葉」を1枚の大きな韓紙に書いて掲示した。韓国には書道もあるが、1枚の用紙に3つの言語があるのは興味深かった。そして、グループ内で「書いた言葉」の意味を教えあうなど交流を深めることができた。韓国文化の紹介として、サムルノリ（韓国の伝統音楽）の演奏をしていただいた。



書による交流—韓国語、英語、ジェスチャーによるコミュニケーション

【オムサ中学校との意見交流会】 平成18年8月30日（中学3年生11名と現地校生徒6名）

本校生徒が進行や通訳を行い「悩んでいること」「自分の夢」について現地校との意見交流会を行った。オムサ中の生徒も日本の中学生が学習に力を入れていることは周知していたし、お互い頑張って乗り越えていこうという雰囲気になっていった。生徒たちは同じ悩みを持っているということが実感できたことで、同年代の韓国人に対してより親しみを持ち、心の距離が近くなったのではないかと思う。

②校外学習、修学旅行

【1年生 校外学習】 ソウル市内探訪と戦争記念館見学

<目標>

- ・王宮などの史跡や戦争記念館を見学したり、衣・食・住さまざまな事項について調べたり、韓国の人々と触れ合ったりすることで、韓国についてより深く知ることができる。
- ・日本と韓国の類似点や相違点を見つけることができる。

班別に博物館や繁華街を見学したり、インタビューをしたりして、ソウルの街を知る活動を行った。

【2年生 歴史学習】 独立記念館、柳寛順（ユ・ガンスン）記念館見学

<目標>

日本と韓国（朝鮮）の歴史、その中でも、「日韓併合」前後の歴史を学習していく。その中で、日本が韓国に行った負の事実と向かい合わせていく。そして、私たちに何ができるのかを考えさせることにより、日本と韓国の真の友好関係づくりができるきっかけとなるようにする。

日韓の歴史学習をさらに深めるために、韓国人にとって「独立への熱い想い」が込められている施設等をめぐらる。この施設は、植民地時代に日本人が朝鮮人に対して行った拷問シーンなどが展示してあり、本校生徒もショックを受けて帰ってくるが、ソウル市内の小・中学校は社会科学見学に行き同じ光景を目にしてきている。韓国の子どもたちが実際に学んでいる歴史的事項を知ったうえで、現地の子どもたちに触れ合っていくことは、これからの日韓関係をしっかりとした視点でとらえる良い機会となるのではないかと考える。

【3年生 修学旅行】 <釜山・慶州>

<目標>

- ・ 韓国の史跡や歴史的建造物に触れ、韓国の歴史を知ることや日韓の歴史を学習することで、これからの新しい日韓関係について考えることができるようにする。
- ・ 集団生活を通して友情を深めさせるとともに、計画を立てて行動するという自主的な活動を身につけさせる。

ソウル日本人学校での歴史学習のまとめとして位置付けている。釜山では近代歴史博物館で植民地時代の日韓の歴史的な関わりについて学び、慶州では歴史的建造物に触れる。また、慶州にある「ナザレ園」の存在を知り、在韓日本人妻の方々との交流活動を行った。ナザレ園とは、1945年の終戦後、朝鮮半島に取り残された日本人女性の一時避難場所を目的として設置されたが、1972年より日本に帰国できない日本人妻の方々が施設に残り共同生活をされている施設である。亡き金先生の意志を引き継ぎ、宋先生が運営されている。現在22名の日本人妻の方々が入所されている。



【ナザレ園での交流】

交流会当日は「春が来た」「ふるさと」などの歌を披露し、お手玉や折り紙を使って交流した。おばあさん方も一緒に歌ってくださり、温かで懐かしい日本の風景が思い起こされるようだった。出身地やこれまでの人生の話、望郷の念などを、おばあさん方が元気に生き生きと話してくださる姿に、逆に元気づけられて帰ってきた。また、優しい人間愛に触れることもできた。私は、韓国滞在中に4回慰問し、そのたびに自分が優しくなれるような気がした。たくさんの方に「ナザレ園」の存在を知っていただき、機会があれば慰問して人間愛に触れていただきたい。

③韓国語の授業

<目標>

- ・ 基本的な韓国語で、日常会話ができるようにする。
- ・ 言語の習得のみならず韓国の文化や習慣に触れようとする態度を育て、国際理解の基礎をはぐくむ一助とする。

年間指導計画に従い、中学1年生は65時間、中学2・3年生は70時間（毎週1時間）の授業を実施している。クラスを3つのレベル（初級、中級、上級）に分け、テキストや内容も子のレベルに応じたものを使用している。韓国語の習得とともに、韓国の伝統的な遊びを行ったり、韓国料理を作ったりと韓国文化に触れさせている。子どもたちは、楽しみながら意欲的に韓国語の学習に取り組んでいる。

3. おわりに

ソウル日本人学校での国際理解教育の実践についてまとめてきた。どの取り組みも先輩方の財産をもとにして、中学部職員、国際交流ディレクターなどと一緒に企画し運営してきたものである。一人では到底やることはできない。

また、今後、新学習指導要領において国際理解教育にかけられる時間が減少していく中で、これまでと同じ学習はできない。子どもたちにどのような力を付けていくのか（ねらい）を検討し、活動内容の精選をしてい

かなければならない。そのなかで、日本と韓国の「真の友好関係づくり」ができる子どもの育成をめざしていくことが大切である。そのためにも、日本と韓国の歴史学習を確実に行っていかなければならない。これは、韓国に滞在し現地の人と触れ合う中で強く感じるところである。

3年間の派遣でさまざまなことを経験し、学び、これまで以上に多様なものの見方ができるようになったと自負している。学んできたことをこれからの未来を背負っていく子どもたちに伝え、様々な国の人たちと友好的に関係を築いていくことができるための「人づくり」の手伝いをしていきたい。この機会をいただいたことに感謝しながら、今後の福岡の教育のため、日本と韓国の「交流の懸け橋」となれるように尽力していきたい。